

ポケットモンスター虹  
～Raphel ?Quartet～

裏腹

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

頂点を極めし、四人の軌跡。

# 目次

A n e c d o t e		A n e c d o t e		A n e c d o t e	
	13		1		
C l o w n		D i v i n e r		R u n n e r	
25					



## Anecdote Runner

空気がねじれた。

大地が抉れた。

その瞬間、瞳孔の散大を自覚した。

体に伝わる振動が、止まりかけの脈動を呼び戻して、意識を連れ戻す。

「すまない」

白黒だった世界に、再び色が付いた。

8つの輝きを集め、4つの試練を乗り越えた青年を冷たく突き放す謝罪。

目の前に転がるのは、旅路と苦楽を共にして、同じ夢を見て、走り続けた相棒だった。

「……………」

俺は今、何を見たんだ。

彼は今、何をくらったんだ。

白目を剥いたライボルトは、数秒前の事さえ語れない。

思い出せるのは、相対する男の、ただただ凍てついたその眼差しだけ。

人の旅を止める瞳。誰かの歩みを終わらせる目。

「威厳がない」だなんて、対面時に侮らなければ、事は変わったろうか。そんなことはない。

生物に訪れる死のように。一方的に進み続ける時のように。そしてその中で犯した罪のように。逃れられないものだった。

悪い夢、酷い夢と、儂い夢——立ち向かう者の意志も、過程も、はじまりすらも無意味と否定する黒竜が、徒に歯向かうだけの愚者を見下ろす。

「……んだよ、そりゃ」

「アドニス、最後のポケモンを」

「オレは今、何を——」

「アドニス！」

審判に促されて送り出すライチュウだが、呆然自失なアドニスには、彼の背中などまるで見えていなくて。

ただ漠然と、口を開いたまま、向こうのチャンピオン「グレイ」を遠くにするだけ。圧倒的な差に、悪寒と薄ら笑いが止まらない。

全てを無に還す一撃で、わからなくなつた。手も足も出す前に、エースが葬られた。「終わらせよう——『だいまんじ』」

自分は、何のためにここまで来たのか。

何をするためにここに立っているのか。

積み重ねた記憶。刻んできた足跡。思い描いた自分。

——何もかも、わからなくなつた。

「青いな」

「うるせーなあ、誰が青二才だ！」

「じゃなくて」

その色に過度な反応を示すのは、きっと自身の未熟さを知つてのことなのだろう。

青年は鼻息荒くするアドニスを、おあいにく様、といなして、高い空を指差す。いくら若くても、皆まで言う必要はない。

ジョウトの中でも一際有名な地、エンジュシテイの最も高い場所『スズの塔』の頂上にて望む景色は、格別であつた。

修行の合間の一休みは、青年二人の言葉を多分に引き出す。

「バードウォッチングかよ………たいした涼し気で、余裕で、呑気だな。そりやアンタの強さからくるものつて考えでいいのかい」

「そうとも言うし、そうでないとも言えるね」

「みみっちな。結局どっちなんだよ」

「当たらずとも遠からず、って言ったのさ」

最初っからそう言えっつての。これは、音として発されない言葉。

「伝わる表現を考えていたら、微妙なニュアンスになってしまったね。ごめん」

「なんで聞こえてんだよ……」

いくら修行で、見えざるものが見えるようになっているとはいえ、心中まで見透かされてはたまらない。

「その……千里眼？ とかいうトンデモ能力も、ジムリーダーとしての実力も、タネも仕掛けもない、と」

「それは、その通りだね。理想や夢に近道はない——それを叶える強さも同じ。君だつて、ポケスロンを極めるにまで至ったアスリートだ。僕たちにできることは、ひたすらに己を鍛え続けることだけだつて、わかっているはずだよ」

「ああ、正論だな。まったくもってわかりやすいぜ。けどな、徹しきれないのも、人間だ」  
何度この地に足しげく通つてみても、塔の上で寝そべつてみても、胡坐をかいてみても、連日、体が動かなくなるまでバトルをしてみても——。

「見えねえんだよ、結果が」

また、寝そべる。口をへの字に曲げて、ふてくされた子供のよう。或いは、床に落ち伸びる雲影のように。



ポケスロン頂点の次に、と始めたポケモンバトルは、大いにアドニスを悩ませて。

何をしてても勝てない。何をしてても頭打ち。手を変え、技を変え、心を変えたこともあった。それでも求める栄光は、霧の中。

「ほう」見つめた後、隣で腰を下ろすのは、傾聴の合図。

「別に、努力が嫌いだなんて言つてねえ。だが、あんまり先の見えねえ話も好けねえんだよ。オレも、こいつらも」

「初心者みたいなことを言うね」

「気が短くてな」

「ああ、確かに短気だね。それでいて、天才だ」

心底、訝った。小馬鹿にされている感覚さえも得たが、彼の性格を考慮し、真面目な発言なのだと納得させる。

「努力の定義の仕方が、ね。いつも報われてきた人のそれだ」

「どういう意味だ？」

「努力の仕方が上手いのか、それとも地力が備わってたのか——定かじゃないけれど、世の中にはどれだけ頑張つても、挫折するしかない人もいる」

「それに比べりゃ、オレは恵まれているとも言いたげだな」

「逆だよ。小さな一歩の積み重ねの価値がわからないのは、とても勿体無いことさ」

何が言いたい？と聞こえてきそうな表情に、さらに言葉を重ねる。

「夢を絶つ人は、何もたつた一度のきっかけで折れる訳じゃない。それよりも前に、何度も、何度も苦境に喘いで、それでも立ち上がって、ちゃんと前へと進んでいる。……何が彼らをそうさせると思う？」

自分で自分の背中を押し続けてきた、自分だけの記憶——そう、紡いだ。

「鍛練の日々は、それを育てていく」

無意味に思える、負けるだけのぶつかり稽古も。息を切らす走り込みも。誰と戦うのかもわからない、技の空打ちも。

アドニスはその穏やかな横顔を前にすると、それらを自然と許すことができた。

倒れそうな時でも、膝を付かなかつたのは、どうしてだった？

下を向くしかなかつた苦しみの中でも、その魂をもう一度動かしたのは、何だった？

「ジヨウトだけじゃない——世界には、色んな場所があつて、色んな人がいる。彼らは幾度となく、君の歩みを止めにかかるだろう。そうなった時、たとえ報われなくとも、その積み重ねは、いつでも君を再動させる」

風に揺らぐ紫のマフラーとバンダナを、今でも覚えている。忘れるものか。

ジムリーダーとして、己の迷いを断ち切り、道を示したあの男。霊使いの青年 “マツバ” が言う。

「何をしてダメで、どうしようもなくなった時は、振り返ってごらん」

——そこに、君の足跡があるよ。

「……………」

大の字に弾ける爆炎を、雷電が相殺した。

瞳を突き刺す閃光で、我に返る。ライチユウが反動で地に着いた。

大丈夫か。そんな心配を胸に見合わせた瞳。

「お前……………」

杞憂だった。バチバチと眩しく爆ぜる戦意が、水晶体の奥で諦めるなど激しく叫んでいる。

「——ああ、悪い」

俯く。自分が恥ずかしくなったから。

勝手に絶望して、勝手に戦意を喪失して、勝手に終わらせようとして。

追い込まれたことなんて、ここに来るまで数え切れないほどあるのに。負けたことだって、今に始まったことじゃないのに。

最後の一体が、なんだ。体力がゼロに等しいから、どうした。

強者を恐れるな。自分達だって、強者だろう。刻んできた足跡は、始まりからずっと

続いているのだから。

身構えるグレイとリザードンへと向き直った男から、先ほどまでの弱さは、消え失せていた。

「危なく、チャンピオン戦で醜態晒すところだったなあ」

再動——ライチュウがもう一度浮き上がり、ボード状の尻尾に搭乗、

「エレキフィールド」

アドニスの眩きを肯い、フィールドの中心に巨大な雷を招来する。

轟音に続くのは、煌めく雷光。放射状に拡がって、場全体をシャインイエローに染め上げた。

ぱち、ぱち、と会場を迸る電気が、エレキフィールドという力場を明確に知らしめる。

「……わーつてるよ。行けるとこまで、だろ」

二人で見据えるのは、王座。体は動く。声も出る。視界だって開けて、空気も澄んでいる。

倒れるには、あまりに早すぎる。潰えた仲間の願いを乗せた背中に、自分の勇気を、ひとかけら。

規模も勢いも桁違いな、恐らくラフェル最大級の「だいもんじ」が、またライチュウの輪郭を歪ませにかかると。

「さあ、奔り抜けようぜ——マイバディ!!」

「!?」

消えた。

グレイがライチユウの残像を見たのは、リザードンが呻いてからの事であった。

「速いー」

片翼を焦がす雷撃。 “エアスラツシユ”、振り向きざま。

文字通りに空を切る。

ビュンという風切りと、バチンという炸裂音が、彼への道しるべのはずなのに、捉えられるのはいつでも光芒だけ。

右を見て、左を向いて、上を睨んで、下を覗いて。翻弄されるリザードンを、<sup>ブラズマテイル</sup>空気の燃えかすが軌跡となって嘲笑う。

「この速度、捕まえられない……!」

「当たり前だろ。オレ達はこれ一本でやってきた! 何より速く! 誰より先へ!」  
強烈な炎は、的が見えざるが故にかすりもしない。

一撃当たれば終わりなのに。そんな観衆の言葉も置き去りに、だいもんじの連打をすり抜けた。

特性『サーフテール』を持つライチユウにとって、エレキフィールドは単なる『でん

き技を強化する舞台』ではない。

「早く！ 速く！ 疾く！ 捷く！ 迅く！ まばたきも許さず全部置き去りにするツ！！」

力場から放出される微弱な電気エネルギーさえも推力に変換し、すばやさを倍化させる。そこから生まれる機動力は、もはや瞬間移動に等しい――。

急制動と急加速、ジグザク軌道と流線機動。まるで我儘な龍のように、雷電は空の波乗りで縦横無尽に暴れて回る。

「10まんボルト――」リザードンが、すれ違いざまの反撃を浴びた。もう一つの翼も焼かれると、たちまち甘くなる空中での姿勢。

アドニスとライチュウは、その僅かな瞬間を見逃さなかった。

「浚えよツ――」

ひととき強い閃光。ボード状の尻尾で突撃し、勢いのままりザードンを上空まで連れ去る。

そうして黄色い流星が重力に逆らうのを辞める時、地表の電気は唸りを上げて、蠢き始めて。

天高くで円を描いたのを合図に、今度は真つ逆さま。隕石よろしくリザードンを一気に地上へと運び込んだ。

アドニスとは瞳を大きくしたグレイへ、ようやくツラが変わった、と不敵に笑う。

「まだこつからだろ。見下ろしてんじやねエぞ、チャンピオンさんよ……！」

「(なんだ、何をするつもりだ)」

「何もなしじや倒れられねエんだよ……こちとら背負うもん背負ってここ立つてんだよ  
！」

「——まさか！」

翼を焦がした竜が落ちてくる。麻痺に蝕まれた巨体が落ちてくる。

それを迎え入れるのは、地上の一点に集中したフィールドの電気エネルギー。

「最強だろうが、チャンプだろうが、関係ねエ！ 今まで通り、やってきたことをやるだけ！ ただ、駆け抜けるだけ!!」

座標はぼつちり。天へと伸びて、槍となれば準備は完了。

「リザードン！」 抵抗を——今となつては発話の外だ。

「その玉座、よこせエ——————ツ!!!」

「ライジングボルト」。それは、黒龍を焼き討つた雷槍の名。

エレキフィールドのエネルギーを限界まで集めて放つ、でんきタイプ最大級の技。

天上へと抗うように大地から昇る、反逆の霹靂。

「リザードン、戦闘不能！」

リザードンと入れ替わりで出したプテラを、すぐさまメガシンカさせるのは、他ならない本気の証明だろう。グレイは相對する者の目を、しかと見つめる。

呼吸を荒らげ、今にも倒れそうになりながら、それでも立ち続ける青年の、爛々と雷が輝く鋭い瞳を。

「……アドニス、だったね。覚えておこう」

「へん、足りねえな……、二度と忘れられねえ名前にしてやるよ」  
進み続けた果てに待つ最後の一步は、そこにあるか——。



## A n e c d o t e    D i v i n e r

灰色に覆われる、空。突き刺すように降り注ぐ白雪と、水晶のような氷。

何も知らなければ綺麗だろう。美しい、と観測者は言うだろう。

ここが人の住めない星だなんて、気付かなければ。あらゆる生命が死に絶え、呼吸の止まった世界だなんて、わからなければ。

ただ一つ残った命——無を司る灰の竜が、凍り付いた大地で蠢き、宙空に向かって咆哮を上げた。

「……ッ」

ずきり、と瞳の奥が痛んで、たまらず目を閉じた。

水晶が見せる未来は、丸く柔らかな形状に反して、今日も今日とて辛く、厳しく、恐ろしい。

シヨッキンクな映像に意識をやられかけ、眉間に手をやる占い師。今に始まったことではないというのに、と独り言を漏らし、俯いた。

苦しげな主を思い遣り、ゲンガーは宿っていた水晶から現れ出た。

霧状の姿から本来の姿形を取り戻し、そっと占い師——サーシスに寄り添う。

「すまぬな……、心配ない。ありがとう」

荒い呼吸を整え、流れた冷や汗を拭いながら、への字に口を曲げたゲンガーを撫でた。幼少の折、力を習得したその時から、長らく見せられ続けているラフェルの未来。その景色。

灰色のドラゴンが無尽蔵の冷気を以て全てを無に帰し、文明が、森羅万象が凍り付いていく。

有り体に表現するならば、それは世界の滅亡だった。

何かが変われば——そんなことを漠然と思いつながら未来を占い続けて、一五年が経つ。観測結果は今日も変わらず。

「孤独なものだな——、残ったのも我だけとききた」

この未来を知っているのは、自分だけ。伝える相手も居はしない。まして相談だつて。

サーシスの家系も、このラフェルの地、及び英雄ラフェルと無関係ではない。

代々、彼ら英雄の民に仕え、この世界の吉凶を占ってきた。のだが——。

『ラフェルを去るといふのは、どういうことですか、父上』

『お前も、あの光景を見ただろう。終わりの時だ。英雄の加護は消え失せ、形骸化した伝説だけが残った。それだけのことよ』

『では、これまで彼らに受けた恩も、一族の誇りさえも忘れ、この地を捨てるということですか』

『サーシスよ、我ら「プリンシヴァル家」は視ることしかできぬ。世が、因果が用意した未来を、ただ他人より先んじて認知するというだけだ。何も優れてなどいない』

『非力であることは、逃げることの理由にはなりません』

『サーシス、愛しき私の一人娘よ。どうかわかつてくれ。我らは、築き上げた我らの栄華を、そして紡いだ未来を、失いたくはない』

『……………良いでしょう』

一族は現当主の彼女を除き、皆その滅亡の未来から逃げるように、ラフェルを立ち去った。

ただ『未来は変えられないのだ』とだけ、言い残して。

視た以上の責任、先見したが故の義務——彼女は自らの意志で、一族とは異なる道を選んだ。

それが、苦難を伴うものと、知りながらも。



わかってる。自分で残るといふ決断をした。何も後悔はない。

「お待たせ致しました、そらのはしらパフェ・メガレックウザエディションでございませう。ごゆっくりどうぞ」

けれども疲れることはあるし、それでたまっていく鬱憤を解消することは許してくれ、と毎度のように思う。

ラジエシティ、港沿いのカフェ。ストレスが溜まってしまった時は、いつも此処で巨大パフェを頼張るのが、サーシスの密かなルーティンとなっている。

仏頂面というのか、愛想の無い表情で黙々と食べ進める姿は、人目からではとても楽しそうには見えないが、本人にしてみれば、これ以上ないリフレッシュで。

「……ふむ」

生クリームとアイスクリームを一緒に味わったり、フルーツとプリンを同時に口の中で転がしてみたり。

大きくとも飽きの来ない味に、思わず夢中になってしまう。内心で何度おいしい、と唱えたかわからない。

「もぐ、もぐ」

「サーシスさん」

「もぐもぐ……」

「あの、サーシスさん」

「もぐ、もぐ、もぐ……」

「サーシスさん！」

口の周りにホイップの欠片。このような姿、彼女のプライベートを知らない者が見れば、さぞ珍しがることだろう。

「なんだ。今、取り込み中——！」

少なくとも、

「サーシス、さん……？」

ラジエスシテイのジムリーダー、ステラは、そうであった。

「奇遇ですね、私もここをよく利用するんです」

「……誰も聞いておらん。というか、勝手に相席するな」

「まあまあ、そうおっしやらずに！ せっかくこうして休日にお会いできたんですし」

ふう、と、ため息まじりにスプーンを啜えながら、窓の向こうを横目で見やる。

一人の休日がよかったのだから……とまでは、この屈託のない笑みを前にして、言葉にはできなかつた。

ステラはしぶい顔で応対するサーシスをよそに、パンケーキを食す。

「ん、おいひい〜……っ」続けざまに見える幸福度高めの表情に、自分も、もしかしてこんな間抜けな顔をしてパフェを食べているのか——なんて、コーヒーを嗜んで考えるサーシス。

「ふう……お買い物は、されましたか？」

「無論だ。そのために来た」

「雑貨屋の『チエリムセレクト』は品揃え豊富で、おすすめです」

「部屋で焚く香を買った」

「む……最近でできたアクセサリーショップ『フワール・デ・アンシー』は、手ごろなものから高級指向まで売っていて、多くのユーザのニーズに応えています」

「新しいピアスと指輪とブレスレットを購入した」

「さすがです。では、お花屋さんの『フラワージェス・フランジェ』は」

「飾るものを注文済みだ。明後日に来るよう配送手続きをした」

「……すっかり女性らしいことをしている……」

「どういう意味だ！」

口元に手をやり、大真面目な面持ちで思考していたあたり、素で驚いていたのだろう。

「ごめんなさい、サーシスさんのこと、あまり知らなかったものだから」

両手を合わせた謝罪のジェスチャーと、ぼつの悪そうな苦笑。ただただ調子が合わな  
いだけだから、立てかけた腹を起こすのも馬鹿らしくなった。

「……呑気なものだな」

「？」

嗚呼、本当に呑気だ。自嘲も込めた呆れ顔。

明日、明後日ではないにしろ、遅かれ早かれ起こる出来事を何一つ知らないでいる。

誰も彼もが、銘々に、ただの日常をなんとなく生きている。当然、目の前で小首を傾  
げる修道女だって。

私も、そちら側ならばな——そんな可能性の話に、密かに花を咲かせて。そうして吹  
き飛ばす。

「——例えば。そう遠くない未来に世界が滅ぶとして、お前は何かができる？」

柄にもなく、文脈の繋がらない会話をして。じ、とその碧眼を見つめてみたりなんか  
して。

何をしているのだろう。気でも触れたか。大馬鹿だな。

「……戯言だ。何でも無い、忘れろ」

早急に自戒して、言葉を引つ込めた。

「この後、お時間はありますか？」

それがもう遅いと気付いたのは、あまりにへたくそな、目の逸らし方をした瞬間のこと。

にらめっこから逃げなかったステラは、パンケーキをぺろりと平らげると、残りの紅茶を飲み干して、おもむろに伝票を手に取った。



「どこへ行く?」「いいから、いいから」そんなやり取りを挟んでサーシスが連れられたのは、ラジエス大神殿。

荘厳な佇まいにおずおずとしながら足を踏み入れれば、柔らかな明かりに照らされた広大な空間が迎え入れてくれる。ステンドグラスで彩られた廊下を通り抜け、着いた先は大広間。

レシラムとゼクロム、そしてラファエルの像が鎮座し、二人を無音と共に見つめている。

「……なんだ、これは?」

「何、って、ラジエス大神殿ですよ?」

「ではない。我を此処に連れてきた意図を答えよと言っている」



「『未来に世界が滅ぶとして、何をするか』——問いに対する私の答えが、これです」  
「『ただ祈る』——と？」

「はい」

サーシスは呆気に取られた。あんな寝言じみた問いかけを大真面目に捉えて答える、  
というのもそうだが、何よりも、

「神頼み、か」

「ええ。私の本分でもあつて……英雄神ラフェルは、お嫌いですか？」

「彼奴を嫌うならば、我は今更ここに残つてはいまいよ——」

拍子抜け、だった。特段、何かをできるとも思つていなかった。

ただ、勝手に期待をしていただけで、そんな自分にも嫌気が差して。

「もしそれが本当だったとして——きっと、その時が来るまでは、何もできないです。私たちはみんなみんな、ちつぽけですから」

「無力故、何もしない、か」

「この世に、無力な者は存在しません。少なくとも、信ずる力は誰しもに宿るものですか」  
「ら」

「世迷言だ」

「いいえ。私はいつでも、生きている今、この瞬間に私ができる一番大きな事を、してい

るつもりです」

世迷言、戯言、謔言……横顔から向いた面持ちは確かに柔和なのだが、不思議と、否定の言葉を跳ね退ける強さを見て取れた。真面目に馬鹿を言っている、と表すのが、最も正しいのか。

「避けられるかもわからない大局にまで、思い巡らせなくともいい。ただ、一緒になつて『明日はいいことありますように』なんて思つてみるだけでも、世界は違うものになるかもしれません」

「平和な奴だな……」

「よく言われます。でもきつと、ほんとは平和がいいんです。笑っているのが、一番なのです。あなただって」

「おい、触るな！ や、やめろ！」

「あら、とても素敵な笑顔ですのに」

両頬に人差し指を当てられ、口角を吊り上げられる。ステラもステラで、柄にもない悪戯をして、少女のようにくすくすと笑っていて。

「先を気にするのも、いいけれど……現在を疎かにするほど見つめてしまうと、疲れてしまうわ」

「もつと楽にしろ、と言いたいのか」

「ええ、その通りです。だって未来が変えられないだなんて、誰も言ってませんもの」  
サーシスは、は、と短く息を吐いた。

これまでの占いが、偶然すべて当たってきただけで——この先も当たるだなんて証明は、誰にもできない。囚われの使命に追われるばかりで、そんな簡単なことも失念していた。

そうだ、思い出した。私はなんでもない、小さきものだ。

「それに、私たちはちっぽけだけれど、孤独じゃない。いつでも誰かと繋がって、何かを為している。ラフェルが沢山の人やポケモンと、この地を創り出したように」

が——それでいい。それがいい。

一人じゃない。馬鹿馬鹿しくなるほどにおめでたい聖女の笑顔が、そう言っている。

頭蓋の中でずつとかかかっていた靄が、晴れた気がした。

背負ってばかりじゃ重すぎる。抱えすぎると転んじやう。分かち合う仲間は、周りを見ればちゃんとして——。

「……フン。わかりきった事を。我が斯様な道理に、気付かんとでも思うたか」

「ふふ、だから悩んでいたのではないのですか？」

「馬鹿者が、悩んでおらぬわ。一言も言っておらん」

「あらあら。では、そういうことにおきましようか」

「まったく忌々しい奴め！ バトルの申し出ならば受けて立つぞ！」

「はいはい、まずはお祈りしましょうね。神殿内ではどうかお静かに」  
「子供扱いするでないわ！」

この地は、一色だけではないから。自分だけのものではないから。  
様々な人の色が乗った、みんなの世界だから。

虹の大地は、諦めるほど沈んではない。



灰色に覆われる、空。突き刺すように降り注ぐ白雪と、水晶のような氷。  
凍てついた大地の上で佇む凶獣に、立ち向かう影あり。

其の者、虹の光携え、止まりし時の中、唯一人、鬨の声を上げる。

理想と真実を司りし二体の聖獣従え、世を蝕む虚無、焼き払わん——。

## Anecdote Clown

「こ、このたびはッ！ 貴重な機会を、お、も、おもうけいただきくださり、ありがとうございます！」

裏返った声を聞いた誰もが、お世辞でも、綺麗な言語とは言わなかった。

各地を旅するポケモントレーナーの少年、アルバは、ラフェルの叡智の最先端——リザイナの地に居た。

「まーまー、そう気負わずに！」

具体的には、リザイナトレーナーズアカデミーの、バトル場に。

フィールド外から朗らかに声をかけるのは、本アカデミーの非常勤講師、そして四天王の顔も併せ持つ眼鏡の女性トレーナー“ハルシャ”であった。

それだけなら、偶然で訪れていたと考えれば、まだいい——。

問題なのは、ここにいるはずのない、もう一人の四天王も居合わせてしまっていると  
いうこと。

「む、無理だろ『緊張するな』なんて……！」

それも、自分が対面するトレーナーズサークルの中で立っている、ときている。

風が吹けば飛ばされてしまいそうな、白く細身な体躯——それでも、威厳は十分で、ピエロの仮面に隠した計り知れない表情が、余計にアルバの緊張を引き立てる。

四天王「ジニア」はそんなことも露知らず、のんきにアルバへ手をひらひらと振って見せた。

アルバは今から、彼と対戦する。キセキシシカの実験という名目で、四天王側からの熱烈なオファーだった。

確かに彼は、世界でもまだ両手で数えるくらいにキセキシシカの使い手だ。エキシビションとはいえ、全てのジムバッジを集めきつていない段階で、憧れの存在と手合わせできるというのは、役得、ないし僥倖に感じられた。

が……、実際にその場面に直面してみれば、胸の脈動が止まらない。

「こ、こんな、夢みたいな……、か、カイドウさん、ちよつと水を……！」

「もう三四杯目だろう、いい加減に慣れる」

「く、くう~~~~~……よし、よしっ！」

ハルシャと同じく観戦サイドにいるカイドウは、とうとう水をくれなくなつた。もはや腹をくくるしかない、と両頬をぱん、ぱん、と叩いて、自身を鼓舞。そして。

「——頼むぞ、ルカリオ！」

エースであり、相棒であり、一番頼りにしている仲間、ルカリオを場内へと送り出す。

「ウオオオオオッ！」弾けたボールから姿を表すやいなや、空へ向かって大きく吼えた。「僕の準備は完了……よろしくお願ひします！」

「ああ、よろしく。数いる四天王の中で、何故あえて僕を指名したのか——不思議なところではあるけれど。ポケモンの相性が有利だから？ 単純に弱そうだったから？ それとも、僕が好きだから？」

「ポケモン、そして戦法、それと、人柄！ あなたのことを、もつと知りたいと思つていたからです！」

「間髪容れない正直者。人として百点満点だ。いいよ、此度は君を心ゆくまで楽しませよう」

そう言うと、ジニアは腰のホルダーから取り出したモンスターボール三つで、ジャグリングを始めた。

左右の手で、交互に一つずつボールを交差させて投げる——カスケードという技。

両手を交差するように回して、円を描くようにボールを運ぶ——スパイラルという技。

「仕上げだね」

アルバが見とれている間に、三つのモンスターボールを順繰りに高く放り、1、2、3のリズムでキャッチする。

「あいてっ」

そのはずだったが、最後の一つを取り損ね、頭頂部にこつんと落下。跳ねたボールはそのまま転げて、フィールドの中でぴたりと止まった。

そのまま否応なしに出現したのは、怪獣と呼ぶに相応しい出で立ちの鎧ポケモン、バングラス。

「か、かくとうタイプ相手に、いわ・あくタイプ……ええ……？」素人のアルバでもわかった。これが明確なミスであると。

とうのバングラスも不本意そうに困惑して、一向に吠えないのが何よりの証拠だ。

「てへ、間違えちゃった。別のポケモンに替えさせてくれないかな？」

「ぶつぶーです！ もう、格好つけるからそうなるんだよ？」

「アハハ、ごめんごめん」

茶目つ気を出して頭をぼりぼりとかいて、誤魔化すような仕草をしようが、初手のカードはこれで決まり。

「ルールは3vs3で交代可、持ち物としてのみ、道具使用をありとします。先に相手の手持ち全員を戦闘不能にした方を勝利とします」

審判を務めるハルシャが開戦の合図として、手で空を切った。

では両者——はじめ！



「先手必勝!!」

開始早々に声を上げたのは、アルバだった。それを聞き逃さず、ルカリオが前に出る。巨体には怯まない。先んじて握った拳へ、強い力を溜め込んだ。

「ミスでも、なんでもいい……またとない腕試しの機会、本気でぶつからせてもらう！」

「グロウパンチ！」

一息で相手の目前に迫り、放つのは、空気さえ震わせる固く重たい正拳突き。

牽制や小手調べなど、小賢しい。相手の弱点を一気呵成に攻め立て、即座に終わらせる。

アルバのルカリオは、いつでも超速攻型。相手よりも早く、多く攻撃を叩き込み、ダメージレースを制することを信条とする。

いわタイプもあくタイプも、かくとうタイプを苦手とする属性だ。これ以上のチャンスはないだろう。

踏み込んで、身を捻り、真正面からのストレートパンチ。

「取った——！」

「本当に？」

「!!?」

アルバは背筋が凍り付いた。

拳が鎧へ至る直前の一秒に聞いた、あまりに無機質すぎる声で。

次の瞬間、ルカリオは大量の炎を浴びていた。

「クオ……—ツ!!」

「ルカリオ——ツ!!」

何が起こったか、わからなかった。しかし、何度か視界を明滅させて、答えを得る。

「かえんほうしや——綺麗な火だろう?」

「そんな、特殊型のバンギラス!? 高いこうげきの性能を活かした物理型が基本のはず

じゃ……—」

「データは時としてあらぬ先入観を生む。そして決めつけ、思い込みという形になって、

君の首をきりきりと絞めつける」

「あのジャグリングの失敗も、この隙を作り出すための……—」

「さあ、どうだろう。本当に間違えたのかもしれないし、君の言う通り作戦なのかも。ど

ちらに捉えたかは知らないけれど、見えた方がきつと正解だね」

「くそ……会った時から、勝負は既に始まっていた……ツ」

「焦つちやダメさ、シヨーはまだまだこれからだよ」

バンギラスの口から吐かれる火炎が勢を増すと、ルカリオはアルバの足元まで吹っ

飛んだ。

ルカリオのタイプの一つ——はがねタイプには、効果が抜群だった。全身を蝕む焦げ跡が、〃やけど〃のステータスを痛々しいまでに物語る。

「趣味が悪いな……、盤外戦術とは」

「最大限の話術と行動を用いた、心理戦——これが彼の戦い方。読み合い、駆け引き、情報戦、徹底的に思考を強要し、決して見えるものだけで勝負しない。ひたすらに本意を隠して、観衆を楽しませることに徹する、道化のようなバトルスタイル」

「ヤツとの相性が最悪なのは、よくわかった」

「強さだけじゃないのよね、ポケモンバトルって」

ハルシャとカイドウの視線の先にいるアルバは、ルカリオに何度も呼び掛けていた。

弱々しい返事で辛うじての体力残存を確認するが、続投させる判断には至らない。

「くっ……ごめんっ！」

歯噛みをして入れ違いにするのは、ライトポケモンの〃デンリユウ〃。

「ありがとう、どうぞよろしく」それとほぼ同時に、ジニアもポケモンを交代させた。

逆三角のシルエットに鋭い触手、不気味な模様が体表でフェードアウトとインを繰り返す。まるで烏賊を逆さにしたような、ぎゃくてんポケモン〃カラマネロ〃が、静かにフィールドに降り立った。

「デンリユウ、〃ゴットンガード〃！」

「カラマネロ、ばかぢから」

姿勢を低め、うねり、地上を滑るような機動で、デンリユウへと突撃するカラマネロだったが、どこからか出現した綿の防壁に、阻まれた。

「いいね、もう一度いこう、ばかぢから」

「何回だって！ コットンガード！」

カラマネロは、お構いなしに突撃を繰り返す。

だが、さしものアルバも、これが無意味ではないと気付いていて。

カラマネロの特性は、ステータスの上下の変動を逆転させる「あまのじゃく」。使用の度にこうげきとぼうぎよをダウンさせる『ばかぢから』は、寧ろメリットに変わる。

つまり時間が経てば経つほど、相手の勢いは増す。だからこそ。

「早急に防御を上げきつて、身を固めて、要塞になって——迎え撃つッ！」

デンリユウは二度のコットンガードで、ぼうぎよが最大まで上昇、こうなつては生半可な攻撃ではびくともしない。

「くらえ、10まんボルト！」

拳を前に突き出し、逆襲のサイン。その愚直な突進を、高火力の一撃できつちりと咎め切った。

重たい電撃を受けて転がるカラマネロを見て、ここまで優位だったジニアもたまらず

両手を上げ、驚くジェスチャーを見せる。

これが嘘か真かはわからないが。

「このまま畳みかけるよ、10まん——！」

「——ひっくりかえす」

どのみち、すぐに知ることになる。

あまりに眩しい発光だった。出所はカラマネロの腹部の、妖しい模様——。

脳みそが揺すられるような感覚に、光の正体を催眠や暗示の類と確信したアルバは、デンリユウに更なる攻撃を指示した。

「はじめて聞く技だけど、おかしなことをされる前に！」

「もう遅いさ」

「くっ——」

ば、と起き上がり、ひゅん、と跳び上がり。ジグザグの閃光は無を通り抜けた。

しゆるしゆると音を立てながら低空を駆け、カラマネロは再びデンリユウへと肉迫、その身に触れる権利を得た。

「ばかぢから」は、もう通じない！」

「それは嘘だ」

「また、おかしなことを——」

「おかしくないよ。ここは皆が嘘つきになる場所だから」

「何……!?!」

カラマネロの触手という鞭が、デンリユウを尋常ではない力で弾き飛ばした。

その姿は、さしずめボール。バットで打たれた、野球ボール。

地べたをこれでもかと舐めまわした後、その躰は動きを止める。

「で、デンリユウ！」 駆け寄るアルバに、返る意志はなかった。

「デンリユウ、戦闘不能」

引き換えに、ハルシャの声が局面の終わりを告げる。

「ね、言った通り、嘘つきになってしまったらう？」

「そんな……一体何が！ コットンガードは!?!」

「『ひっくりかえす』は、対象の能力変化の状態を逆転させる技さ。ちなみにこれは本当」

皆まで言う必要は無かった。

上昇していたものが、一瞬にして下降に変えられただけのこと。

要らぬ油断をして。騙され、行動を誘い出されて。

ジニアが指の上でくるくると回していたトランプの柄が、いつしかAから2へと変化する。

「つまらなそうな顔だった観客が、一瞬にして沸くように。意味不明だった行動が、直後にサプライズを起こすように——最強と最弱が、一瞬で逆転してしまうこともある。それらを目の当たりにした人々のびつくりする顔を見るのが、楽しみだね。僕はどうも人を驚かせるのが好きらしい」

これも嘘か本当か、わからない。本人のみぞ知る。

ただアルバにわかるのは、

「…… プテラ、君に任せた！」

明らかに自分に悪い流れが出来ていて、それをなんとかしなければならぬ、ということだけ。

手札が全て明かされる。最後の一匹は、ひみつのコハクから復元された古代の翼竜「プテラ」。

「飛び回って、隙を窺って！」

「させないよ」

「じごくづき」——指示が木霊すると、カラマネロの二本の触手は長く伸び、その灰色の巨体を捕まえようと追いかけ始めた。

際限の無い空と、大きな翼からなる高機動もあり、文字通りの追手を振り払うのに難はない。が。

「サイコカッター」

「しま——っ！」

見えるものから逃げるばかりで、不意の方向からの遠距離攻撃に気付けなくて。

「目に見えるものが全てじゃないと知りながら、目に見える情報しか受け付けない……何にも代えがたい僕らの悪癖だ」

「プテラ、逃げろ！」

三日月状のピンクの刃は、想定をはるかに超える威力であった。こうげきの数値の上昇が、このタイミングで活きてくる。プテラは悲鳴のような咆哮を上げ、一撃で墜落した。

ドスツ。落ちて尚も立ち向かおうとする、そんな勇ましい姿を唾棄するように、触手はその身を一突きした。

「プテラ、戦闘不能」

「……っ……っ！」

アルバは、震えていた。

これが負けん気や、武者震いであれば、どれほどよかったか。

これまで積み上げた常識や、トレーナーとしての知識、経験——全てが、ガラガラと音を立てて崩れ落ちていく。相手が常に自分の上を往く。こんなにも何もさせてもら



えなかったのは、初めてだ。

「そんなわけがない。嘘であればいい。嘘であつてほしい。自分はきつと悪い夢を見ている。或いは狐か何かに化かされ、今でも虚構の中を生きている。ちなみにこれは嘘」

性別を悟らせなくぐもつた声が、余計に焦りを誘発し、彼の呼吸を荒くする。

「本当に嘘なのか、それとも本当が嘘なのか、はたまた嘘の嘘なのか。シヨールはまだ続いているよ、アルバくん」

言動全てが確信犯というのが、恐ろしい話。

追い込み追い込んでから、舌戦による心理的な揺さぶりで精神を乱し、相手の判断力を欠如させる。

何もルールは破っていない。破ってはいないが、もしも彼がポケモントレーナーという肩書でなければ、どうなっていたか。考えただけでも身の毛がよだつ。

ダメもとで目をきゅつと閉じ、視覚を遮断しても、結局脈拍は変わらなくて。

「もう止める、レベルが違い過ぎる。挑むには早すぎたんだ」

「そうね、言い出しっぱだけれど、少しマズいかも」

見かねたカイドウの介入にハルシヤも賛同し、止めに入ろうとした。

「ストップ」

その時だった。

彼らに向くジニアの掌。しかしジニア自身は、アルバの方から視線を逸らさない。釣られるように見た彼の腰に、震えるモンスターボールが一つ。

「へ……………」

アルバは、それを手に取る。中にいるのは、残った最後の一匹、ルカリオであった。握る手から、波導の温かさが伝わる。それはやがて強靱な意志となり、アルバの胸の中に流れ込む。

「ルカリオ……、君は……」

まだ、終わってない。まだ、戦える。

負けを重ね、どん底に落ちて、それでも『もう一度』を繰り返してきた。

歯を食い縛って、何度でも、勝つまで立ち上がってきた。

僕は、そうやって戦ってきた。

「……………ああ、そうだったね」

絶対に屈しない。逆境に折れたりしない。

負けさえも糧に出来る——それが、それこそが、僕らの一番の強さだった。

「だから、いつだって恐れずぶつかっていったんだ——！」

ボールがフィールドの中で輝く。

満身創痍でなお、ルカリオはファイティングポーズを取った。その眼中で燃える焰

は、未だ消えず。

サイコカッターが飛んでくる。

“しんそく”で回避、コンマの世界を駆け抜けてカラマネロへと蹴りを入れ、離脱。再びアルバの前で構えた。

やけど状態で落ち込んだ攻撃力に、上昇状態の相手のぼうぎよという最低の組み合わせで与えられるダメージなど、雀の涙にも満たない。

それでも、けれども、ルカリオはフーツと息を吐き、その戦意を燃やし続ける。

「ボロボロだね。降参は？」

「そんなわけ！ ショーはまだ、終わってないから！」

「いい顔してる。そうこなくっちゃ」

「ルカリオ………思い出そう」

あの時のことを、思い出す。

弱い自分を、負けてしまう自分を認めた、あの時を。

それでも進み続けると誓った、あの時を。

ただの強さではない——皆を守るための強さを欲した、あの時。

「——あの瞬間を！」

刹那、風が渦巻いた。

それはアルバとルカリオを包み込み、彼らの姿を覆い隠す。

続けざまに地表から漏れ出した虹の光は盛大に巻き上げられ、やがて竜巻と合わさって、眩い光のドームと化した。

「まさか、この土壇場で起こすとは」

大地が唸る。

「もしかして、きたきたきたきた……!」

空気が震える。

「さて、待ちに待った大一番だ。展開はどう転ぶ?」

この世界で、もう一度。

「ルカリオ——、キセキシソカツ!!」

「ルオオオオオオオオオオオツ!!」

勇気と一緒に、弾け飛ぶ七色。

再び見えたアルバは瞳に虹が宿り、ルカリオはより勇猛な闘士となっていた。

キセキシソカツの発現——安定して行えるものではないが、今この瞬間だけは、アルバにも確信があった。

勝ちたいという強靱な魂。

強くなりたいたいという純然たる願い。

それらが相棒とシンクロしたから。

「目を逸らせないわ、まばたき禁止ね……!」

カイドウは「データを取ってあるが」と言おうとしたが、子供よろしく好奇心で目を輝かせるハルシヤを見て、野暮な物言いをやめた。

「いける……」

澄んだ視界と、穏やかな時の流れの中で、眺めた自身の手をきゅつと握る。

キセキルカリオの体力は全快し、火傷は体表より漏れ出た波導エネルギーに乗って、発散された。

力を体内で溜めきれない。だからこそ、オーラという形に乗って揺らめいて。

賞賛を込めた、控えめなハンドクラップが鳴る。

「ダメージは帳消しで能力は全体強化、ってところかな。見事だね、ラフェル」  
「そこ」にいるのかは、知らないけれど。

一転、ジニアの眩きと同時に、カラマネロがばかぢからによる突進。

「……!」だが、叶わない。片手のみで、数センチの後ずさりだけで、受け止められた。

「二段階上がった攻撃力を受け止めるの……!?!」

「元来の筋力がさらに強化されているようだ」

「カラマネロ」

主の呼び声に反応し、急速に間合いを取り、仕切り直しの態勢を取るが、

「バレットパンチ」

「うん、速い……」

瞬きの後、ルカリオは目の前にいた。

しんそくをも超える瞬間速度を以て追ってきた闘士の瞳が、『逃げるな』と確かに云った。

苦し気な呻き声上がる。誰のものは言わずもがな。弾丸のような拳は、額面通りの超速ストレート。

『グアアガアア！』

上昇したぼうぎよが幸いし、なんとか持ちこたえるも、ダメージは大きい。

ふっ飛ばされても向き直り、すかさず反撃するのは、一秒でも猶予を与えれば追撃に曝されると知っているから。

拒絶の意志、三日月型の<sup>サイ</sup>光刃<sup>コ</sup>を出鱈目<sup>カ</sup>なほど乱れ打つ。

「噂には聞いていたけれど、それよりもずっと凄まじい力だ。少しだけ焦っているよ。いや、もしかすると結構」

猛攻で抵抗する烏賊も、おしやべりに興じる道化も、二人にとってはもはや些細なもので。

ルカリオはお構いなく、ゆっくりカラマネロへと歩いていく。

一発、首を傾け回避。

二発、身を捻つてすり抜け。

十発、当たるものだけを拳で叩き壊す。

六十発、駆け抜け、すり抜け、通り抜け。

百発——もう、視界にはいなかった。

「インファイト」だあああああああああああッ!!」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

カラマネロが次にルカリオを視認した時。それは、全身に拳と蹴りを叩きつけられた時。

ラツシュ、ラツシュ、ラツシュ。光速にも等しい打撃を、無限とも間違う回数、浴びせられる。

無事なはずもない。カラマネロはどうとう白目を剥いた。

「カラマネロ、戦闘不能!」

「まずは、一体……!」

カラマネロの次に出てきたのは、アルバの大方の予想通り、バンギラス。

しかし気にする事でもない。相性有利と、これだけの力の差故に、見据えるのはまだ見ぬ三体目のみ。

「いつ力が切れるかもわからない、速攻で終わらせる！」

「かえんほうしゃ！」

「同じ手は！」

地面を激しく殴れば、巻き起こる衝撃波。

「喰らうものかッ！」

火の勢いを風の壁で防げば、攻略完了。

「トレーナーの戦術を悉く実現させるだけの力と、その力を引き出す、人間の強い精神。

これが、キセキシンカ」

「脳内で考えたことは思いのまま。これを極めれば、恐らくできないことというものは、存在しなくなる」

睨んだ怪獣目掛けて一步踏み出せば、やることは一つ。

カラマネロよりも劣る機動力と、強化もなされていない耐久と、対応の済んだ技——  
負ける要素は何一つない。

アルバとルカリオの表情が叫ぶ。このまま決める、と。



「今度は通す！ インファイト」、叩き込めええええッ！」

ズドン、と鈍さを取り越した、重厚な音。

地響きさえ感じ取れるほどだ。

「行つたか……」

カイドウの視点からは、いや、ここにいる誰から見ても、ルカリオはバンギラスを確実に貫いていた。

止まる時間、静まり返る空間。呼吸さえ止まりそうな緊張が、数秒。

動きを止めたバンギラスを見て、そして念のためにジニアの佇まいをも確認し、アルバは心の中で「やった」と安堵する。

「そろそろクライマックスだね」

——棒立ちのピエロが、その瞬間を待っていたとも知らないで。

ゾクリ。本能が危険を察知しても、やっぱり、もう遅い。

ルカリオの拳が、バンギラスから抜けない。短く息を吸って、見上げた怪獣の姿——それは少しずつ揺れて、歪んで、ほつれて、終いには全く別の姿に変わり果てた。

「きあいのタスキ……!?!」

風に乗せられ宙を舞う、ぼろぼろの赤い襷。きあいのタスキ。

一撃で致命打となる攻撃を受けた時、ぎりぎりのところで踏みとどまらせてくれるア

イテムだ。

だが、それを使ったのはバンギラスではない。

漆黒の体毛と、流線を描く細い体躯。四足とも二足ともつかぬ、闇夜にかかる濃霧のような妖しさを湛えた、化け狐にも似た獣――。

「くそっ！ ルカリオ、バレット――！」

「『カウンター』」

名を、『ゾロアーク』。

拳を押さえ、捕縛したまま見舞ったのは、先ほどの攻撃のちょうどきつかりの倍返し。いくらキセキシシカといえども、耐えられるはずがなかった。

「る、ルカリオ、戦闘不能――」

虹が解けて、消え去った。

少しの間を置いて姿が戻り、その場で倒れ込んだルカリオへ、駆け寄るアルバ。

やはり、目に見えないところでの戦いだっただけ。

ゾロアークの特性『イリュージョン』は、他のポケモン、とりわけトレーナー戦では、控えた手持ちポケモンに化けるといふ効果を持つ。

備えた魔力で周囲に幻覚を発生させ、無いものを有るように、有るものを無いように見せ、攪乱するのだ。

「あえて相手の得意なポケモンに化け、弱点の技を引き出し、確実なダメージをもらい、きあいのタスキで耐えて、最大反撃<sup>リターン</sup>で勝負を取る……バンギラスの特性『すなおこし』が発動しなかったのは、初めからゾロアークだったということか」

「物理技だから返せたけれど、特殊技の『はどうだん』とかだったら、どうしていたのかしら。ほんとに危なっかしい賭けをするんだから……」

「賭けは分が悪いほど、面白くなるものさ。それにカラマネロが突破された段階で、どのみちこうするしかなかった。バンギラスではあのルカリオを止める手立てはなかったかもしれないし」

ジニアはフィールドの定位置から離れ、ゾロアークの元へ。

「いい仕事だったよ、お疲れ様」毛量の多い体表を撫でてやると、疲れた、と言わんばかりに寝そべった。

『ボールに戻せ』の合図なので、言う通りにしてやる。

「く、う~~~~~~~~つ!! 悔しい~~~~~~~~つ!!!」

ジニアとしては、落ち込んでいるのかもと気にしてみたが、どうもそういうわけでもないように。

「ごめんよ、ルカリオ」その傍らで、アルバもパートナーをボールに戻した。

「フィールド外での戦い……勉強になりました。ありがとうございます!」

「楽しんでもらえたなら、何よりだよ。僕たちも、いいものを見れた」

固い握手は、悔しさと共に、次は勝つという意志も込められている。

「でもやつぱり強いなあ、四天王は。全然うまくいかないや……」

「僕でなければ、勝てたかもしれないね。例えば、そこにいる」

「ちよつと、変なイジリ方しないでよく！ 生徒がどう反応していいかわからないでしよー！」

「アハハ、ごめんごめん。それじゃあ……再演待<sup>リベンジ</sup>つてるよ。今度はポケモンリーグという、もっと大きなショーで会おう」

アルバは、離れていくその小さな背中を見送った。

そして、改めて世界の広さを知り——勝ちたい相手が、また増えた。

「……よし」

あれが四天王。あれがジニア。

チャンピオンロードは、まだまだ終わりそうにない。